

## 蘇る愛語

島根県 完全寺 前住職 田中俊朗

私の師匠であり、父である前の住職は、十四年前に亡くなりましたが、川柳をこよなく愛していました。川柳は、父が入院した病院できっかけを得てはじめたそうです。

当時、父は国語の教師でしたので、教壇に復帰後、すぐに川柳クラブを創設しました。川柳の魅力は、さまざまな飾りを捨て去り、ありのままに湧き上がる情感と、懸命に生きる人々の姿を、万感の思いをこめて表現するところだと思います。この表現方法が、当時の父の心情にぴたりときたのでしょうか。

父の句です。「叱られた遠い日のこと墓洗う」

父が仏道の教えを受けた師匠は、ことのほか厳しい方でした。幼少期から、師匠に何事をするにも叱られ、厳しい薫陶を受けました。厳しかった師匠の墓を洗いながら、父は何を思っていたのでしょうか。

父も弟子を育てる立場になって、初めて師匠の厳しさの意味が分かり、師匠が無性に懐かしくなり、厳しい中にも慈愛に満ちた師匠の表情や姿が蘇ってきたのではないのでしょうか。

「叱られた遠い日のこと墓洗う」

かすかな木漏れ日を浴びて、一所懸命に師匠の墓を洗う父の姿が浮かんできます。

(平成二十三年三月放送)